

「思考」と「始まり」－アーレントによるハイデガーの批判的継承についての一考察－

発表要旨

小石川和永

本研究発表は、ハンナ・アーレント最晩年の思索の営みである『精神の生活』(思考)(1978)が『カントと形而上学の問題』(1929)を中心としたハイデガー批判であること、さらに『カント政治哲学の講義』(1982)は、そうした批判を踏まえた上でのアーレントによるハイデガーへの応答であることを示すものである。より具体的には、アーレントの実存理解の背後にハイデガーによるカントの超越論的構想力解釈についての批判的継承が横たわることを描出することで、そこにアーレント独自の实存理解の理論的枠組みが提出されていることを論証することを、本研究の目的とする。本研究発表は、以下の3節より構成される。

I. (「凡庸な悪」と「思考への問い」) では、『精神の生活』(思考)、序論に示される、アーレントが同書を執筆した直接的な動機－アイヒマンに見た「無思考性」－である「凡庸な悪」の問題からアーレントが「思考」と「善悪の判断」についての関連について再考を促されたことに着目し、「無思考性」の問題がハイデガー的な「存在の問いと実存との関係」に読み替えることが出来ることを指摘する。その上で、同書において暗示された主題が、ハイデガーの基礎存在論の「解体」と、その作業を通じた「善悪の判断」に関連する「思考」のあり方を模索する意図を以て行われたことを、同書の序論における「形而上学的誤謬」と呼ばれる問題－「真理[認識]のモデルに基づいて意味[思考]を解釈」した哲学の系譜－の内に見いだすことが可能であることを示す。すなわち、アーレントによる「形而上学的誤謬」の「解体」が、彼女独自の現象学的解体である可能性を指摘し、本研究報告の端緒とする。

II. (「現れの志向性」と「思考」:アーレントのハイデガー批判) では、I.で示唆した「解体」の過程を『精神の生活』(思考)におけるアーレントの議論に跡づける。具体的には、まず、同書の議論が実際に現象学の系譜に連なることを同書第1章7節(「リアリティと思惟する自我:デカルト的懐疑と *sensus comunis*」)内で展開されている「現れの志向性」(the intentionality of appearances)の分析を通して示し、すでにここにハイデガーのカント解釈が暗示されていることを示す。次に、同書での「解体」が具体的にはハイデガーによる『カントと形而上学の問題』(1929)での「産出的構想力」解釈－とくにそこでの「自我」(the I)と「私は思惟する」(the I think)の関係性－に向けられている点を、同じく同書第3章18節(「一者の中の二者」)での議論の分析から導出する。さらに、そうしたハイデガーの「産出的構想力」理解とこれに基礎付けられた『カントと形而上学の問題』での「存在論的認識」における「時間」理解とが、『精神の生活』(思考)の第4章20節でアーレントによってどの

ように反駁されているのかを論証する。これを以て、(本発表の)II. では、『精神の生活』(思考)におけるハイデガー批判が、ハイデガーの「産出的構想力」の「解体」であると同時に、『カント政治哲学の講義』でのアーレントの「再現的構想力」解釈の予備的考察であることを示す。

III. (「美的判断と再現的構想力：アーレントによるハイデガーの批判的継承」)では、前節での議論を踏まえた上で、『カント政治哲学の講義』で展開されるアーレントによる美的判断力解釈が、「再現的構想力」の理論であることを、「産出的構想力」との対照性をアーレントの議論の分析を通して呈示する。また、そうした対照性を指摘する中で、アーレントの政治哲学(『人間の条件』(1958))で示される「行為」(action)、「始まり」、「世界のリアリティ」といった概念を、「再現的構想力」が理論的に説明することを論証し、アーレントの「再現的構想力」解釈が現象学的実存思想として、世代を「超えた」共一存在の地平についての理論を提出していることを論じる。